

親友の教え子

校長 武井 正明

前回登場した親友「岡ちゃん」について、紹介します。

大学3年に出逢って、もう40年近くになる。学生時代は互いに怠惰な生活で、足を引っ張り合っていた。私は新潟で一足先に中学校の教員に、彼は筑波大の大学院に進み、東京で高校の教師になった。年末に湯田上温泉で「生存確認」するのが毎年恒例の楽しみだ。

「俺の昔の教え子がさだまさしの本を出した。よかったら見てみてよ」と、ある日彼からラインが来た。

当時の勤務校「東京大学教育学部附属中等教育学校」について「岡ちゃんが教えてもらってんじゃないのか」「よくしたもんで全く質問に来ないよ」なんて話していたものだ。

彼は大学院の卒論に行き詰まり、新大時代の卒論と全く同じものを出して留年した経歴を持つ。バレると思っていたのだから。自分にはそんな度胸はない。

なぜそんな信じられないバカなことをしたのだろう。「まさかバレるとはなあ…」と平然と苦笑しながら呟いた彼に、空恐ろしいものを感じたのを憶えている。

その親友が、高1の教え子最初の国語授業でさだまさしの「案山子」を題材にして授業をした。その授業が彼の人生を変える。教え子の心に「灯を点けた」のだ。

以来、その教え子はさだまさしの魅力に取り憑かれてしまった。そして、さだまさしと同じ國學院大に進み、大学院を卒業し、ついにはさだまさしの書生になり『さだまさし解体新書』なる本まで出版してしまった。

早速取り寄せて読んでみた。驚いたのが彼の文体だ。岡ちゃんとそっくりなのだ。

まるで親友が書いているのかと錯覚するくらいだった。その内容は、さだまさしの歌にある、色や枕詞などを丁寧に分析した、実に興味深いものだった。教え子が自分の授業の影響を受けて、それを仕事にしている。教師として、これほど光栄なことはない。

『金を残すは三流、仕事を残すは二流、人を残すは一流』これは私が好きな野村克也監督の言葉。親友は、カネはなさそうだが人を残している。さすがだ。

私が生まれて初めてコンサートに行ったのが中二時代。県民会館さだまさしだった。

まだ若く細かった。銀縁メガネ、美しいギターとバイオリンの音色。「胡桃の日」のマリンバ宅間久義の演奏に驚いた。上下真っ白ないでたちで歌う最初の曲は「きみのふるさと」ラストは「黄昏迄」だった。生の歌声ってすごいな。感動だった…。

あれから40年余り。さだまさしのコンサートはそれから何十回も行ったけれど、今はあまり聴いていない。さだまさしも、さすがに歳を取った。

さだまさしがソロデビューして半世紀以上経つ。また聴いてみようかな…。